

# 祖父母を含む家族認知

藤見純子

(大正大学)

Grand-mas(-pas) Belong to My Family

FUJIMI, Sumiko

## 要約

12の親族カテゴリーごとの家族認知の実態を、家族認知率と家族認知パターンを用いて観察した。家族認知率が50%を超えるのは、高い順に「子ども」「配偶者」「孫」「子どもの配偶者」「祖父母」であり、生殖核家族の範囲を超えてかなり広い。祖父母を除くすべての親族カテゴリーにおいて、家族認知率は後続コーホートほど高い。しかし、最後続コーホートでも、祖父母に対する家族認知率は55%と高率である。家族認知パターンからみると、家族認知あるいは非認知は、基本的に親族カテゴリー単位になされており、この傾向は後続コーホートほど顕著である。家族認知率と家族認知パターンのいずれを用いても、「親」と「配偶者の親」の2カテゴリーを除くすべてのカテゴリーにおいて、家族認知に男女差はない。

キーワード：親族カテゴリー、家族認知率、家族認知パターン、コーホート

## はじめに

本稿では、20世紀末時点での日本人が、自己が保有する親族のうちどのような親族カテゴリーにある者を家族と認知しているのかを、主としてコーホート別に観察し、その観察から注目される若干の点について考察を行う。

周知のように、全国家族調査は、日本の家族が社会変動の中でどのように変化していくかについての信頼できるデータの収集を行う意図をもって開始された。家族についての多様な側面を一定の枠組の中で整理し、それぞれについて全国確率標本から収集されたデータは、いずれの側面に関しても詳細とはいえないけれども、さまざまな利用価値をもつことが期待される。質問紙中のほとんどの項目は、既存の調査ですでに用いられたものを検討し、若干の修正を施した上で採用されたが、ここで扱う家族認知に関するデータはその限りではない。

NFR98では、C.C.Harris (1969)の提示したT核モデルを基礎に、かつ日本の伝統的な親族認知規範を考慮して、人びとが家族と認知するかもしれない親族カテゴリーとして12カテゴリーを用意し、対象者個々人が保有する各カテゴリー別の生存親族数と、各生存親族を家族と認知するかどうか(以下家族認知)について、情報を収集している。ただし、その情報収集デザインはカテゴリー別にやや異なる。「配偶者」についてはその有無と家

族認知、また「親」および「配偶者の親」の2カテゴリについては、これに該当する4人それぞれの生死別と家族認知を確認している。「子ども」および「きょうだい」の2カテゴリの場合、生存者数は把握しているものの、家族認知については年長3番目の者までしか尋ねていない。とはいえ、以上5カテゴリの親族ひとりひとりについての家族認知を尋ねるにあたっては、「この方は、今現在、『あなたの家族』の一員ですか」の設問と、「はい」「いえ」「どちらともいえない・不明」の回答が用意されている。残る7カテゴリ（祖父母、おじ・おば、きょうだいの配偶者、配偶者のきょうだい、甥・姪、子どもの配偶者、孫）に関しては、各カテゴリ別生存者数と、その中で家族と認知する人数とを知ることができる。

このように、人びとが自己の保有する親族の中で、どのような親族を家族とみなし、あるいはみなさないかの実態は、これまでまったく把握が試みられていない。しかし、家族が親族関係に基づく親族組織（集団であれネットワークであれ）の一部であるとの考えを採用する限り、どのような親族が家族であるのかを知らねばならない。NFR98では、これの理解に接近する1つの方法として、個人の認知水準における家族成員の把握を着想した。人びとが家族に対してもつ期待・意見・イメージなどの一端は、多様な家族意識調査が明らかにしてきたし、また、一定の続き柄の親族を居住関係との関係で家族とみなすか否かについては、全国レベルの調査も行われている（西岡・才津、1996）。しかしながら、NFR98の家族認知データは、観念性・主観性・抽象性の程度においてこれらとは異なる。

親族関係が組織化される2つの方法のうち1つは、個人が一定の基準に従って認知した人びとと一定の権利義務を相互に期待しあう関係を結ぶ方法である（正岡、1975；藤見、1988）。個人がどのような親族を家族と認知しているかは、現在の日本の家族がいかなる親族組織として存在するのかを想定することを可能にさせる。とはいえ、本稿では、個人の認知水準からみた家族成員の全体像をとらえるには至らない。そのための第一歩として本稿では、親族カテゴリ別の家族認知のありようを具体的に観察する。

観察にあたっては、家族認知率、家族認知パターンを用いる。すでに用いた家族認知率とは、各カテゴリの生存者（子どもときょうだいの場合は年長3人目まで）の延べ数を分母とし、各カテゴリで「家族の一員」とみなされた人数を分子とした比率である（2000、藤見）。このような家族認知率は、複数の親族を含みようがない親族カテゴリ（典型的には「配偶者」）に関する個人たちの認知のありようを示すが、しかし複数の親族を含みうる親族カテゴリについての個人の家族認知状況はこれによつてはわからない。こうした親族カテゴリについては、各カテゴリの複数親族に対して等しく家族認知がなされているかどうかを把握することにした。すなわち、複数親族が存在する可能性の高いカテゴリについては、「全員肯定（各カテゴリの全員を家族の一員と認知）」、「一部肯

定」、「全員否定」の3パターンに区別し、これを家族認知パターンと呼ぶことにする<sup>1</sup>。また、このうち「全員肯定」と「一部肯定」とを合わせることによって、個人単位の家族認知率を知ることができる。本稿で用いる家族認知率とは、こうした、各カテゴリーに含まれる1人以上の親族を家族と肯定している個人の比率のことである。なお、家族認知率の算出および家族認知パターンの作成にあたっては、「どちらともいえない・不明」の回答は「認知なし」もしくは「否定」と扱った。

これらを用いた親族カテゴリー別の家族認知のありようは、主として出生コーホート別に観察される。NFR98は第1回全国家族調査であり、同様の調査を第2回以降継続することにより、個人の集合体水準での時間の経過に伴う変化の趨勢を把握したい意図のもと、出生コーホートから抽出した男女個人サンプルを観察対象としている。スナップショット仕様の横断データから時間的変化に関する憶測をすることは避けて、変化の事実を確認(時系列データの収集)してから変化を扱うのが至当と考えられるからである。家族認知についての初歩的な観察にあたっては、その趣旨をまず生かしたいと考える。

また、部分的には地域(データベース上の変数名は「都市規模」)間比較の結果にもふれる。これは、昭和40年から50年代半ばまで(1965~1980年)までにわれわれが行った親族調査研究において、親族組織が地域社会水準では多様であることを確認したことに基づいている<sup>2</sup>。

まずは全体を概観し、ついで親族カテゴリー別に主としてコーホートによる家族認知の比較観察を行う。比較観察は、名義変数のクロス集計とその結果についてのカイ2乗漸近有意確率と残差を参照する。

## 2. 概観

観察結果の記述に先立って指摘しておきたいことは、20世紀末時点での日本人たちは「家族」という言葉を知っているばかりでなく、それなりに理解しているということである。「この方は、今現在、『あなたの家族』の一員ですか」、あるいは「それぞれの関係にある方の中で、現在『あなたの家族の一員』だと思える方は何人いますか」の質問に、無回答であった者はほんのわずかであった。家族という言葉は、必ずしも日本の民俗語とは

<sup>1</sup> このパターンは、7つの親族カテゴリーについては各生存親族数と家族と認知する人数しかわからないことを踏まえ、しかも家族認知の実態を全体的に観察しておくことをここでの課題としたために、作成したものである。しかし、「子ども」および「きょうだい」についての認知の有無が年長3番目までしかわからないことも含め、別の測度を工夫する必要があるかもしれない。

<sup>2</sup> 「家」的な家族認知が存在する部分として共同体的色彩の相対的に濃い地域社会を考え、それを弁別するために「都市規模」を用いた。しかし、この変数は調査時点での居住地域を識別するにすぎない。この時点で「町村」に居住している人が、必ずしも共同体的地域社会の中で生活しつづけたとは限らないし、「大都市」に居住する者のなかには、1年前までは「町村」にいた者もいるだろう。また、昭和29年以降、政治的意図をもって市の再編(市域拡張)が全国各地でなされてきたことを考えると、実質上は多分にムラの地域であっても、たとえば「10万未満の都市」と分類されることもありうる。こうした点を考慮すると、結果はともかく、「都市規模」変数をこのように用いることには問題が残る。

いえなかった状況から、いまではほとんどの人びとの生活の中で生きた言葉になっているといえるかもしれない。

家族認知に関する概要を把握するために、まず回答者全体における（個人単位ではない）家族認知率を表1に示す。これによれば、親族カテゴリーに基づく家族認知が行われていることを確認できると同時に、家族と認知されやすい親族カテゴリーとそうでないカテゴリーとがあることがわかる。「配偶者」および「子ども」はもともと家族と認知されやすい親族カテゴリーであるが、「親」「孫」「子どもの配偶者」、さらには「祖父母」の家族認知率も50%を上回り、最右欄に示した対象者の「おじ・おば」にあたる者も、その16%は家族と認知されている。

表1 各親族カテゴリーでの家族認知率（全体水準）（%）

配偶者	子ども	親	孫	子どもの配偶者	配偶者の親	祖父母	きょうだい	きょうだいの配偶者	配偶者のきょうだい	甥・姪	おじ・おば
96.3	91.9	76.2	71.9	70.8	59.4	55.9	40.8	27.7	25.3	20.0	15.8

注：「親」「配偶者の親」はいずれも父母双方の合計。

表2には、親族カテゴリー別に家族認知パターンの分布を、個人水準での家族認知率（以下、家族認知率）の高い親族カテゴリーから順に示した。この順序は表1とまったく同じである（配偶者を除く）。これによっても、過半の人びとが家族と認知するカテゴリーは「配偶者」「子ども」「孫」「子どもの配偶者」「祖父母」であることは確かである。「孫」、なかんずく「祖父母」の家族認知率が個人水準でも6割近い値を示していることに注目したい。しかも、「おじ・おば」全員を家族と認知する者が1割強いる。認知される家族の範囲は、生殖核家族の範囲を超えてかなり広い。

表2 親族カテゴリー別家族認知率とパターン（%）

	N	認知率	全員肯定	一部肯定	全員否定
子ども	5,777	97.1	88.2	8.9	2.9
孫	2,161	84.5	72.4	12.1	15.5
子どもの配偶者	2,433	81.4	71.6	9.8	18.5
親	4,139	76.0			
配偶者の親	3,414	59.4			
祖父母	1,345	58.7	52.0	6.7	41.3
きょうだい	6,359	46.3	41.3	5.0	53.7
きょうだいの配偶者	5,407	34.8	30.1	4.7	65.3
配偶者のきょうだい	5,170	31.6	27.1	4.5	68.5
甥・姪	5,713	28.2	21.5	6.7	71.8
おじ・おば	4,869	22.0	12.1	9.9	78.0

注：Nは各カテゴリーの親族を保有している者。空欄は非該当（扱い）。

と同時に、「孫」や「子どもの配偶者」の全員を家族でないとみなす者も2割弱いること、さらにどの親族カテゴリーでも「一部肯定」が一定程度存在すること、とくに、家族認知率の高い「子ども」「孫」「子どもの配偶者」において「一部肯定」比率が相対的に高いことに注目しておきたい。

ところで、一般に親族カテゴリーは次の諸点から区別することができる。①系譜空間上の位置と距離、②血縁と姻縁の区別、③世代間の区別、④性別の区別、⑤父方母方の区別、⑥直系傍系の区別である。ここでは父親と母親、おじとおば、甥と姪、兄弟と姉妹はそれぞれ同一の親族カテゴリーと扱っているし、祖父母は父方と母方とを識別していないけれども、その他の点から、表2の結果を整理し直してみよう。

系譜空間上の位置と距離は、ふつう親等によって表される。NFR98 が取り上げた11の親族カテゴリーは1親等から3親等の範囲内におさまる。「親」「配偶者の親」と「子ども」「子どもの配偶者」は1親等、「きょうだい」「配偶者のきょうだい」「きょうだいの配偶者」「祖父母」「孫」は2親等、「おじ」「甥・姪」は3親等である。

表2は、1親等の親族の家族認知率は総じて高いことを示している。「子ども」の家族認知率は最高である。しかし、これにつづく家族認知率は、1親等である「親」や「子どもの配偶者」や「配偶者の親」ではない。これらを上回る家族認知率を示すのは2親等の「孫」である。ただし、「孫」と同じく2親等の「祖父母」は、「子どもの配偶者」や「配偶者の親」よりも家族認知の程度が低い。これは、系譜空間上の距離の遠近が必ずしも家族認知の程度と相即していないことを意味する。とはいえ、系譜空間上の距離が短いものほど家族と認知されがちであることは確かである。

事実、逆に系譜空間上の距離が長いものほど家族認知の程度は低い。3親等の「おじ・おば」そして「甥・姪」もとても低く、次いで低いのは、低い順に2親等の「配偶者のきょうだい」、「きょうだいの配偶者」、「きょうだい」である。

仮に50%の認知率を目安とするならば、20世紀末時点での日本人は、2親等までを自己の家族員に含めているといえる。

双系的親族組織における親族関係は、親子関係を基本とする血縁関係と結婚など縁組を契機として結ばれる姻縁関係に区別できる。血縁関係にある者を血族、姻縁関係にある者を姻族という。NFR98 が家族認知データを収集するにあたって用いた12の親族カテゴリーのうち、「親」「祖父母」「子ども」「孫」「きょうだい」「おじ・おば」「甥・姪」はいずれも血族であり、「子どもの配偶者」「きょうだいの配偶者」「配偶者の親」「配偶者のきょうだい」は姻族である。

親等および血族姻族の区別双方を考慮して11カテゴリーを整理すると、表3のようになる。

これを参照すると、家族認知は姻族に対してよりも血族が優先されている傾向がうかがえる。たとえば、姻族1親等である「配偶者の親」や「子どもの配偶者」よりも血族2親

等である「孫」の方が家族認知率はやや高いし、同じく2親等であっても「きょうだい」の方が「配偶者のきょうだい」や「きょうだいの配偶者」よりも家族認知程度が高い。

表3 血族・姻族別および親等からみた親族カテゴリー

	1親等	2親等	3親等
血族	①子ども、④親	②孫、⑥祖父母、⑦きょうだい	⑩甥・姪、⑪おじ・おば
姻族	③子どもの配偶者 ⑤配偶者の親、	⑧きょうだいの配偶者 ⑨配偶者のきょうだい、	

注：①②などは、家族認知程度が高いほうからの順位。

11の親族カテゴリーは、世代上3つに区分される。上向世代に位置する親族カテゴリーは、血族では「親」「祖父母」「おじ・おば」、姻族では「配偶者の親」であり、同世代は血族である「きょうだい」と姻族である「きょうだいの配偶者」および「配偶者のきょうだい」である。下向世代としては、血族では「子ども」「孫」「甥・姪」、姻族では「子どもの配偶者」が該当する。この区分からみると、NFR98 データは上向世代よりも下向世代の親族に対して家族と認知する傾向を示しているようである。たとえば、同じく1親等である「子ども」と「親」では前者の方が家族認知程度は高いし、同じく2親等の血族であるにもかかわらず、上向世代である「祖父母」よりも下向世代である「孫」の方がかなり家族認知の程度が高い。さらに、同じく血族3親等である「甥・姪」と「おじ・おば」では、前者の方が家族認知程度はやや高い。

直系親族とは親子関係の縦の連鎖につらなる親族、傍系親族は親子関係から横に派生する親族のことである。11カテゴリー中、血族では「親」「祖父母」「子ども」「孫」が直系であり、「きょうだい」「甥・姪」「おじ・おば」は傍系親族である。同じく血族2親等である「孫」「祖父母」「きょうだい」のうち、この順で家族認知程度が高いことは直系優先の規則性を示唆しているともいえよう。

このように、NFR98の家族認知データは、家族としての認知が一般的には、2親等以内の親族の中で、親等が同じであれば姻族よりも血族、同親等の血族であれば下向世代より上向世代、同親等血族であれば傍系より直系に対してなされがちであることを示している。もともと、繰り返してはあるが、3親等の親族を家族とみなす者の存在を無視できるわけではない。

ところで、姻族よりも血族、下向世代より上向世代、傍系より直系の方がそれぞれ家族認知の対象になりがちであることに解釈を加えようとする場合には、「媒介親族」という概念が有効かもしれない。これは、「視野的構造」と称されて親等距離からのみ双系的親族組織全体の構造を理解しようとした方法の弊害を踏まえて、それが拡大・縮小する際の規則性を見出すために実証的データを踏まえて提示された概念である（正岡、1975）。この概念を応用して、たとえば、個人にとって親、子ども、配偶者は、他の親族を当該個人に関係づける媒介親族であり、その他の親族は媒介親族の存在を前提として存在する被媒

介親族と考える。そうすると、「子ども」が家族と認知されることを通じて、「子どもの配偶者」も家族と認知されるということになる。また、「きょうだい」が家族と認知されるのは、「親」の家族認知を前提とするといえるかもしれない。

試みに、「きょうだい」の家族認知を例に取り上げて、この点を確認してみよう。表4は、親の生死、および生存の場合は家族認知の有無別に、「きょうだい」の家族認知パターンをみたものである。これによれば、「きょうだい」が「全員肯定」パターンであるのは、親を家族とみなす場合では64%を占めるのに対して、親が死亡している場合には30%と半分以下の値である。家族認知率でいえば、前者の69%に対して、後者は36%となる。また「きょうだい」の「全員否定」の比率は、親を家族と認知しない場合、そして親が死亡している場合に高い。いずれも差は著しく大きく、「きょうだい」の家族認知が「親」の生存と家族認知にかかわっていることが示唆されている。

表4 親の生死・家族認知有無別「きょうだい」認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
親肯定	2,887	64.3	4.7	31.0
親否定	940	2.9	1.9	95.2
親死亡	2,532	29.5	6.4	64.2

被媒介親族とみなしうるすべてのカテゴリーについて同様の検討をしていないが、もしこのことが確かめられれば、親等のより近い者、血族、下向世代の者、直系親族が相対的に家族とみなされがちであることの説明が可能かもしれない。とりわけ「孫」と「祖父母」の家族認知程度の相違は、「孫」の媒介親族である「子ども」と「祖父母」の媒介親族である「親」との生存の確率、および家族認知程度の相違を反映とみなしえよう。これについての確認は、別の機会での課題としたい。

### 3. 親族カテゴリー別の家族認知

前節では、一般的には2親等以内の親族の中で家族認知がなされる傾向があること、しかし親族カテゴリー別の認知状況には看過できない相違がみられることを示唆した。これを踏まえてここでは、親族カテゴリー別の認知にみられる規則性とそれからのズレを、主としてコーホートを単位にして観察する。ここでは、ズレが生じている部分にも関心を寄せるため、前節で用いた家族認知率よりも主要には家族認知パターンを観察変数として用いる。

スナップショット仕様の横断データにおける出生コーホートは、その意味を特定できない。それは、出生してから調査時点までの経過時間（年齢）でもあるし、別々の時代を生きたことも意味する。いずれかを特定はできないが、ここでは密かに後者の意味を与えている。したがって結果の表示は、基本的に先行コーホートから順に示す。

NFR98 は、1921 年から 1970 年出生者の全国確率標本を 5 年刻みの出生コーホート単位から抽出しており、したがってコーホート数は 10 である。集計は、この 10 コーホートばかりでなく、10 年単位の 5 コーホート、さらには 3 コーホート別にも行った<sup>3</sup>。しかし、本稿での記述は基本的に 5 コーホート別のデータに基づいて行い、10 コーホート別に特徴が見られる場合には、そのつど指摘することにした。部分的には 3 コーホート別の結果を示すこともある。コーホートはいずれの場合も、C1921-40 のように表記する。

なお、集計作業の段階では、コーホートに加えて男女間の比較も試みた。しかしながら、ほとんどのカテゴリーにおいては、認知パターンの分布に全体でもコーホート単位でも統計的に有意な男女差は認められなかったため、以下ではいちいちの記述はさける。家族認知状況に男女差が認められたのは「親」と「配偶者」の 2 カテゴリーである。このこと自体、興味深い現象で、それについてはもちろん相違の内容を示すつもりである。また、先にもふれたように、ズレが生じている部分への関心から地域規模別にも観察を行ったので、その結果についても簡単に紹介する。

以下における親族カテゴリー別の家族認知状況の記述は、家族認知率の高いもの(表 1・2) から順次行う。なお、表 1 で最も高い家族認知率を示している「配偶者」は、いずれのコーホートにおいても 95%以上の高い家族認知率であることがすでに確認されており(第 1 次報告書、2000)、しかも家族認知パターンからの観察は不可能なので、以下では扱わない。

### 3.1 観察結果

「配偶者」を除く各親族カテゴリーに対する家族認知状況は、次のとおりである。

#### 【子ども】

ほとんどの者にとって「子ども」は家族である。家族認知率は、先行コーホートほど低いが、最先行の C1921-30 でもその家族認知率は 94%にのぼる。

現在子どもをもつ有効回答者 5,777 名のうち、子ども数が「1 人」であるのは 17%である。この者たちについて前記したような家族認知パターンを適用することには問題があるが、便宜上この者たちも対象に含めた認知パターンのコーホート別の分布をみた(表 5)。「全員肯定」比率は、後続コーホートほど高い ( $p < .001$ )。とくに 1946 年以降出生の 5 コーホートでは 95%以上が「全員肯定」である。1945 年以前出生者では、「全員否定」にもまし

---

<sup>3</sup> 3つのコーホートは、1921-1940 年コーホート、1941-1955 年コーホート、1956-1970 年コーホートである。C1921-40 は戦前の、全体社会水準では伝統的な親族組織文化が濃厚であったと考えられる時代を経験している。C1941-55 は、終戦までには学齢期に達していなかった者を含め、戦前の生活文化を感得しつつ、高度産業化に伴う種々の急激な変化を支え、あるいはその中で成長したコーホートである。そして C1956-70 は、全体社会水準でいえばほとんどの生活領域で合理化が進行した環境の中で人生を歩んできたコーホートといえよう。



て「一部肯定」比率が先行コーホートほど高く、3コーホート別の最先行コーホート（C1920-1940）では「一部肯定」が18.5%になる。

「子ども」はほとんどの者にとって家族であるが、そのことは後続コーホートにおいてより強いといえる。先行コーホートでは、家族認知率もやや低いが、それ以上に注目されるのは、「一部肯定」比率の高さである。

表5 5コーホート別「子ども」の認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
全体	5,777	88.2	8.9	2.9
C1921-30	1,012	75.6	18.4	6.0
C1931-40	1,243	77.6	16.9	5.6
C1941-50	1,488	91.7	6.4	1.9
C1951-60	1,191	98.0	1.8	0.2
C1961-70	843	99.2	0.2	0.6

Nは子どもをもつ有効回答数。

なお、子ども人数別に「一部肯定」の比率をみると、「2人」の場合は8.7%であるのに対して、「3人以上」では14.5%と高い。また「1人」の場合の「全員肯定」率は95.4%にとどまっている。さらに、地域規模が小さいほど「全員肯定」比率が低く、「一部肯定」比率が高い（ $p<.001$ ）。ただし、地域規模別の子ども数の分布は確かめていない。

#### 【孫】

後続コーホートには「孫」はいない。「孫」がいるのは1956年以前の出生者である。C1956-60女性2名、C1951-55の男性6名、女性15名も「孫」をもっているが、これらは観察対象から除外する方が妥当だろう。したがって、先行する3コーホートの限りでの結果を述べる。

家族認知率はコーホートによってさほど異ならない。しかし、「全員肯定」比率はより後続のコーホートで高く、「一部肯定」比率は先行コーホートほど高い（ $p<.001$ ）。この点は、上でみた「子ども」の場合と共通している。

「一部肯定」比率は地域規模が小さいほど高い（町村で17.8%）が、「全員否定」比率は「13大都市」と「町村」で相対的に高く、「10万以上都市」「10万未満都市」で低い（ $p<.001$ ）。

表6 5コーホート別「孫」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
C1921-30	888	68.1	17.5	14.4
C1931-40	858	71.7	11.1	17.2
C1941-50	392	83.2	2.8	14.0

注：5コーホート中、後続2コーホートでは該当者なしもしくは少数のため省略。

### 【子どもの配偶者】

「孫」とほぼ同じく、C1956-60の女性2名、C1951-55の男性7名、女性22名はここの観察対象から除外する。対象とした3コーホート中、中間のC1931-40における家族認知率がやや低い。しかし、家族認知パターンの分布は、「子ども」「孫」と相似した態様のコーホート間の相違を示している。すなわち、後続コーホートほど「全員肯定」比率が高く、「一部否定率」が低い。また、家族認知率は地域規模にかかわらずほぼ一定しているが、「全員肯定」比率は地域規模が大きいほど高く、「一部肯定」比率はその逆である。

表7 5コーホート別「子どもの配偶者」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
C1921-30	897	68.8	14.0	17.2
C1931-40	963	70.1	9.6	20.4
C1941-50	542	79.2	3.9	17.0

注：5コーホート中、後続2コーホートでは該当者なしもしくは少数のため省略。

### 【親】

「親」カテゴリーには、最大2人の親族（父親と母親）が存在するはずであり、したがって家族認知パターンを作成できる。しかし、実際に父母双方をもつ者は全体（不明を除く）の32.9%であり、パターンからの観察は対象者数を著しく限定してしまう。試みに、父母双方が健在である者について双方に対する家族認知をみたところ、認知が一致しないのは2.9%のみであった。こうしたことから、「親」カテゴリーについては、父母いずれかを家族と認知していれば「家族認知あり」とみなした上で、「親」を1人以上もつ4,139名の家族認知の有無をみた。いうまでもなく、「肯定」の比率は家族認知率と同義である。

「親」をもつ者は、「祖父母」をもつ者と同様、先行するコーホートで少ない。また、すでに指摘しておいたように、このカテゴリーについては、全体でもコーホート別にも認知率に男女差がある。このため、表8には、男女別・3コーホート別に認知率を示した。

男女差は、全体でもコーホート単位でも、男性の方で家族認知率が高い点にある。しかも男性では、後続コーホートほど家族認知率は高い。女性も、後続コーホートほど認知率が高いけれども、最後続コーホートでも男性との差がある。

表8 男女・3コーホート別「親」の家族認知率

	C1921-40		C1941-55		C1956-70		p
全体	(408)	66.4	(1,707)	73.0	(2,024)	80.4	.000
男性	(206)	72.8	(820)	82.3	(968)	85.4	.000
女性	(202)	59.9	(887)	64.4	(1,056)	75.9	.000

注：( )内は1人以上の「親」をもつ者。pは認知有無別のカイ2乗漸近有意確率（両側）。

男女いずれにおいても、「親」家族認知率は地域規模による相違を示す。男性の場合、

家族認知率がもっとも高いのは「町村」であり（87%）、残余3地域間の差は大きくない。女性では、「13大都市」において「親」家族認知率がもっとも高い。それがもっとも低いのは「10万未満都市」、次いで「町村」である。

#### 【配偶者の親】

「親」カテゴリーと同様に、配偶者の父母双方をもつ者は29.9%（既婚者中の33.1%）と少なく、そのうち家族認知が一致しないのは1.3%である。したがって、これについても父母いずれかを家族と認知していれば「家族認知あり」とみなした上で、家族認知率を観察する。これをもつ該当者が先行するコーホートで少ないこと、家族認知率に男女差があることも、「親」の場合と同じである。

全体での家族認知率は59%で、「親」の家族認知率76%に比べればかなり低い。コーホート単位に言えば、後続コーホートほど家族認知率が高いといえる。しかしこのことは男性がそうであるために生じたことで、女性に限るとコーホート差は認められない。いいかえれば、先行コーホートにみられる「配偶者の親」に対する家族認知率の男女差は、男性でのそれが後続コーホートほど高くなることにより、後続コーホート（1956年以降出生者）ではほとんど消失しているのである。ただし、「13大都市」の場合にはこのことは妥当しない。「13大都市」では、男性の家族認知率にコーホート差はなく、したがって先行コーホートにおいても男女差は認められない。

表7 男女・3コーホート別「配偶者の親」の家族認知率

	C1921-40		C1941-55		C1956-70		p
全体	(411)	52.1	(1,493)	57.9	(1,509)	62.8	.000
男性	(284)	45.8	(788)	51.3	(694)	61.2	.000
女性	(127)	66.1	(705)	65.4	(815)	64.2	.840

注：（）内は1人以上の「配偶者の親」をもつ者。pはカイ2乗漸近有意確率（両側）。

#### 【祖父母】

これに関する有効回答数は、全カテゴリー中もっとも少ない。当然のことながら、先行コーホートでこのカテゴリーの親族をもつ者は例外的であり、該当者は後続コーホートの方に多い。そこで、5コーホートのうち後続3コーホート（C1941-50、C1951-60、C1961-70）を取り上げることにする。

家族認知率は後続コーホートほど低い（ $p < .01$ ）が、にもかかわらず5コーホート中では最後続であるC1961-70での家族認知率も60%にのぼる。ちなみに、C1961-70を10コーホート分類で2分してみると、より先行のC1961-65の方が後続のC1969-70よりも家族認知率は低い（52.5%と56.4%）。しかし、後続コーホートほど家族認知率が低いという5コーホート中後続3コーホート間でみられる傾向は、これまでみてきた親族カテゴリー

と異なる傾向である。「一部肯定」の家族認知パターンの比率は、コーホートによる差がほとんどない。

地域規模別では、「町村」における家族認知率の高さ(66.3%)が注目されよう(p<.01)。このうち「一部肯定」比率が10.0%を占めている。残余3地域間での家族認知率には差が認められない。

表8 5コーホート別「祖父母」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
C1941-50	248	59.7	8.5	31.9
C1951-60	304	53.9	7.2	38.8
C1961-70	693	48.5	6.2	45.3

注：5コーホート中、先行2コーホートでは該当者少数のため省略。

### 【きょうだい】

以上みてきた親族カテゴリーではいずれも、家族認知率が全体で50%を超えていたが、ここより以降で観察する親族カテゴリーはどれも、「全員否定」比率が「全員肯定」比率を上回るカテゴリーである。

家族認知率は、後続コーホートほど目に見えて高い。とくに、C21-30 およびC31-40と、C1941-50 およびC1951-60、そしてC1961-70 という3者間の相違が著しい。この著しいコーホート差については、たとえば対象者本人や相手の年齢（そこには双方の結婚や親なりの経験などが含意されよう）から説明することも可能かもしれないが、先にもみたように、媒介親族である親の生死からも検討しうる。さらに、きょうだい数との関係もあるかもしれない。保有きょうだい数「1人」の場合(1,804名)の家族認知率は53.1%であるが、「2-3人」(2,579名)では47.3%、「4人以上」(1,976名)では38.7%であり、保有きょうだい数が多いほど家族認知率は低いからである。なお、「一部肯定」パターンの比率には、コーホート間での相違は認められない。このことは、地域規模別にみても妥当する。地域規模別の相違は、規模が大きいほど家族認知率が高い点に認められる(p<.001)。

表9 5コーホート別「きょうだい」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
全体	6,359	41.3	5.0	53.7
C1921-30	945	28.1	5.9	65.9
C1931-40	1,242	30.2	5.5	64.3
C1941-50	1,543	38.8	5.7	55.5
C1951-60	1,356	42.9	3.9	53.2
C1961-70	1,273	63.5	4.0	32.5

### 【きょうだいの配偶者】

全体の家族認知率は「きょうだい」よりも10ポイントほど低いが、後続コーホートほど、

とくにC21-30 およびC31-40 と、C1941-50 およびC1951-60、そしてC1961-70 という3者間の相違が著しいこと、「一部肯定」比率がコーホート間でほぼ一定している点は、「きょうだい」と共通する傾向である。ただし、「きょうだい」の場合と異なり、家族認知率も地域規模による相違がなかった。

表10 5コーホート別「きょうだいの配偶者」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
全体	5,407	30.1	4.7	65.3
C1921-30	837	21.3	5.3	73.5
C1931-40	1,120	19.9	5.9	74.2
C1941-50	1,421	29.9	5.5	64.6
C1951-60	1,165	34.6	3.9	61.5
C1961-70	864	45.9	2.2	51.9

【配偶者のきょうだい】

全体における「全員肯定」比率は、「きょうだいの配偶者」よりもさらに低い。先に述べたように、血族優先の家族認知が、姻族を媒介とする「配偶者のきょうだい」よりも、血族を媒介親族とする「きょうだいの配偶者」の方での家族認知率を高めている面もあるのかもしれない。

全体としての家族認知率は低いとはいえ、後続コーホートほど、とくにC21-30 およびC31-40 と、C1941-50 およびC1951-60、そしてC1961-70 という3者間の相違が著しいことは「きょうだい」および「きょうだいの配偶者」と同様である。また、家族認知率も「一部肯定」比率も地域規模による相違を示さないことは、「きょうだいの配偶者」の場合と共通する傾向である。

しかし、「きょうだい」や「きょうだいの配偶者」と比べると、「一部肯定比率」にコーホート差（先行3コーホートで高く、後続2コーホートで低い）がうかがわれる。

なお、10コーホート別でみると男女差のあるコーホートが1つある（5%水準）。C1946-50がそれである。このコーホートでは、女性の「一部肯定」比率が高い（7.6%）ところに特徴がある。

表11 5コーホート別「配偶者のきょうだい」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
全体	5,170	27.1	4.5	68.5
C1921-30	801	20.2	5.4	74.4
C1931-40	1,081	19.1	5.6	75.4
C1941-50	1,353	27.5	5.3	67.2
C1951-60	1,098	29.7	3.4	66.9
C1961-70	837	39.8	2.4	57.8

### 【甥・姪】

全体の家族認知率は 30% を切っているが、それでも後続コーホートほどそれが高く ( $p < .001$ )、最後続コーホートでのそれは 40% にのぼっている。「一部肯定」比率は、先行 3 コーホートで高く、後続 2 コーホートで低い。

表 12 5 コーホート別「甥・姪」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
全体	5,713	21.5	6.7	71.8
C1921-30	909	10.1	8.5	81.4
C1931-40	1,186	11.1	8.0	80.9
C1941-50	1,489	21.4	8.0	70.7
C1951-60	1,234	29.0	5.5	65.5
C1961-70	895	36.9	2.7	60.4

これまでみてきたほとんどの親族カテゴリーと違って、10 コーホート中では 3 つ (C1946-50、C1951-55、C1961-65)、5 コーホート中では 2 つ (C1941-50 と C1951-60) のコーホートで、男女差が認められている (前者ではいずれも 5% 水準、後者ではいずれも 1% 水準)。5 コーホート中男女差のある 2 つのコーホートはいずれも、女性の方で「一部肯定」比率が高い。加えて C1941-50 では、男性の方が「全員否定」比率が高いという特徴もある。

地域規模別の相違は、家族認知率の点でも「一部肯定」比率の点でも、全体ならびに男女別それぞれにおいて認められない。

### 【おじ・おば】

「親」と同世代ではあるが、おそらく個々人の父母双方がもっている (いた) きょうだい数との関係で、先行コーホートでも「おじ・おば」をもつ者は少なくはない。全体の家族認知率をもっとも低くけれども、他の多くのカテゴリーと同様、後続コーホートほど家族認知率が高いという傾向はわずかながら認められる。

表 13 5 コーホート別「おじ・おば」家族認知パターン

	N	全員肯定	一部肯定	全員否定
全体	4,869	12.1	9.9	78.0
C1921-30	296	14.2	2.0	83.8
C1931-40	705	11.6	6.1	82.3
C1941-50	1,280	12.7	8.6	78.8
C1951-60	1,280	11.7	12.0	76.3
C1961-70	1,308	11.8	13.0	75.2

しかしこの傾向は、「一部肯定」比率が後続コーホートほど高いことによるものである。いいかえれば、「おじ・おば」の家族認知率は、その一部に対して家族認知をする者が後続コーホートでより多く現れているために、後続コーホートで高いのである。「全員肯定」

比率はすべてのカテゴリー中、どのコーホートでももっとも低い。後続コーホートは、先行するコーホートよりも「一部肯定」比率が高いばかりでなく、同一コーホート内で男女差が認められる点でも先行コーホートは異なる。最後続のC1961-70では、男性の方が「全員肯定」比率が高い ( $p < .05$ )。またC1951-60では、男性の方で「全員肯定」比率が高いばかりでなく、「全員否定」比率が低い ( $p < .05$ )。地域規模別の相違は、「甥・姪」についてと同様、全体でも男女別でも、認められない。

### 3.2 観察結果の要約

以上みてきたように、家族認知の状況はすべての親族カテゴリーについてコーホートによる線形の相違を示している。しかもそうした相違は、11の親族カテゴリー中10カテゴリーにおいて、後続コーホートほど家族認知率が高いという内容をもつ。しかも、このうち9カテゴリーでは後続コーホートほど「全員肯定」比率が高い。いいかえれば、後続コーホートほど、より広い範囲の親族カテゴリーに対して、しかも各カテゴリーの全員に対して、家族認知を行っている。

その意味で唯一の例外は「祖父母」であろう。「祖父母」は、後続コーホートほど「全員肯定」も「一部肯定」も低いのである。しかしそれでも、最後続コーホートで55%の家族認知率を示している。

11の親族カテゴリー中6カテゴリー（子ども、孫、子どもの配偶者、祖父母、きょうだい、きょうだいの配偶者）の認知状況は、いずれのコーホートでも、男女による相違を示していない。「配偶者のきょうだい」「甥・姪」「おじ・おば」の3カテゴリーの場合は、一部のコーホートにおいて認知状況に差が認められたが、すべてのコーホートにおいて認知状況に男女差があるのは、「親」および「配偶者の親」の2カテゴリーである。「親」の認知率は、どのコーホートでも男性の方が高く、「配偶者の親」の認知率は、男性で先行コーホートほど低い。

地域（規模）間の家族認知状況の相違は、11カテゴリー中7カテゴリーで認められた。「子ども」「親」「孫」「子どもの配偶者」「配偶者の親」「祖父母」「きょうだい」である。とくに「町村」では、「子ども」「孫」「子どもの配偶者」についての「一部肯定」パターンが相対的に多く、「祖父母」についての家族認知が高い。

こうした観察は、前節でみた傾向あるいは規則性が、コーホート、そして部分的には地域規模においても、これまたかなり規則的な相違があることを示している。そしてこのことは、家族認知の変化へと関心を向けさせる。

## 4. 探索的考察と検討

上でみてきたような家族認知のありようは、不変とは考えられない。変化するものと考えた場合、どのように変化したかという関心と、どのように変化する（と予想される）か

という関心が生じうる。後者の関心は、先にも触れておいたように、2回目以降の全国家族調査データを待つことにし、ここでは禁欲すべきだと思う。他方、前者の関心も、同様のデータが過去において収集されていないので、ほとんど展開することはできない。しかしながら、過去、われわれも含めて多くの研究者による「ムラ」社会をフィールドとしてなされた研究が指摘あるいは示唆していたことと、上でみたこととの間には、共通点と相違点があるように思われる。

共通点の1つと思われるのは、夫婦をセットとして親族もしくは家族と認知する点である。昭和40年代(1965~75年)われわれが採用していた親族組織研究の手法は、戸籍(当時は研究上の閲覧が可能であった)を調査時点から明治5年まで遡って筆写し、それを資料にR.Firthの研究(1965)に倣って世帯主をEgoとするkinship diagramを作成した上で面接調査を行い、それによってdiagramに登場していないが親族と認知する者を補足し、かつそれを含むすべての親族について性別、出生年、死亡年、現住所など基本属性情報の収集を行って基本データとしつつ、親族が接触する具体的場面(典型的には葬礼や婚礼)での援助の具体相をアーカイブ資料によって可能な限り行動次元で把握するというものであった<sup>1</sup>。各kinship diagram上の夫婦はほとんどすべて同様に認知されていることは、面接調査で十分確認された。たとえば「いとこA」の妻は「いとこA」と同じく親族なのである。

NFR98の家族認知データにおいても、それは同じように思われる。確かな証左とはいえないが、「子ども」と「子どもの配偶者」との家族認知パターン、「きょうだい」と「きょうだいの配偶者」との家族認知パターンの関連をみたところ、前者については72.5%、後者については76.2%で家族認知パターンが一致していた。

NFR98データでは親族カテゴリー単位の家族認知、いかえれば多くのカテゴリーにおいて「全員肯定」あるいは「全員否定」パターンが圧倒的に優位し、「一部肯定」パターンがわずかであったが、このことは、多くの研究がムラ社会の「家」と呼びうる親族集団について得た、そして30年ほど以前にわれわれも確認した理解と異なるかもしれないと思われる点である。「家」の場合は、たとえば、同じくある夫婦の子どもであっても、あととりはその夫婦が属する家の成員であるが、婚出した娘は家成員ではない。逆にいえば、婚出した娘にとっての家は婚家であり、彼女の実親は実家の親であっても、彼女と同じ家の成員ではない。いずれにせよ、一定の親族カテゴリーにある者がある種自動的に家成員であるとみなされることはなかったとあってまず間違いはない。同一カテゴリーの親族を全員とみなす傾向は、「家」的家族認知の基準が薄れたことを示唆しているのか、それとも、それは残っているけれども「家」と「家族」とは別物と考えられていることなのだろうか。

性急な回答は仮説としても求めるべきではないかもしれないが、上でみた家族認知状況のコーホート間の相違、地域規模間の相違は、「家」的家族認知の基準が薄れたとみなす



ことを支持しているように思われる。とくに、ほとんどの親族カテゴリーにおいて、後続コーホートほど「全員肯定」比率が高いこと、また「町村」において「子ども」「孫」「子どもの配偶者」についての「一部肯定」パターンが相対的に多く、「祖父母」についての家族認知率が高いことが注目される。

このことと関連して、「親」と「配偶者の親」の認知の仕方を考察してみる。「家」的家族認知基準が採用されている場合は一般に（男性が婿養子などの場合を除き）、男性は結婚後も「親」を家族と認知するだろうが、結婚した女性は「親」ではなく「配偶者の親」を家族と認知するであろう。その結果、「親」と「配偶者の親」の家族認知状況は、男女で異なることになる。典型的には、男性の場合は「親」は家族と認知するが「配偶者の親」は認しない、女性の場合はその逆という現象がみられるはずである。すでに指摘したように、NFR98 データは、「親」および「配偶者の親」の家族認知率だけが各コーホートで男女差があることを示していた。また、男性における「親」の家族認知率はいずれのコーホートでも女性より高く、「配偶者の親」の家族認知率は先行コーホートでは低いが、後続コーホートほど高いことも観察されている。これを補強するために、「親」1人以上および「配偶者の親」1人以上を保有している者を対象に、2カテゴリーの親に対する家族認知の有無に関する組み合わせパターンを作成し、これを、男女別、地域規模別、コーホート別に観察する。

該当者全体としてみると、「双方肯定」がもっとも多く(53%)、以下「親のみ」(23%)、「双方否定」(16%)、「配偶者の親のみ」(10%)となるが、表 14 によれば、「親のみ」は男性の方で、「配偶者の親のみ」は女性の方で、それぞれ明らかに高い。

表 14 男女別にみた父母認知と義父母認知のパターン (%)

	N	双方肯定	親のみ	配偶者の親のみ	双方否定
男性	1,326	52.4	29.0	4.0	14.6
女性	1,346	49.3	17.7	15.1	17.9

注：Nは実親1人以上および義親1人以上を保有している者。

男女それぞれにおけるコーホート（3コーホート分類よる）別パターン分布の相違は、いずれも1%水準で有意である。このうち、男性における「親のみ」パターンの比率は、先行コーホートから順に39.5%、34.1%、23.2%であり、女性における「配偶者の親のみ」パターンの比率は、同順で22.0%、19.7%、11.7%である。また、同じく地域別にみた別パターン分布の相違も、男女双方1%水準で有意である。このうち、男性における「親のみ」パターンの比率は、「町村」から順に39.9%、29.8%、24.5%、23.2%であり、女性における「配偶者の親のみ」パターンの比率は、同順で24.3%、15.8%、11.8%、8.7%である。先行コーホートおよび「町村」において、男性の「親のみ」パターン、女性の「配偶者の親のみ」パターンが相対的に目立つことは、「家」的家族認知基準がこれらの部分に

存在していることの反映とみなしえないだろうか。

ちなみに、男女それぞれにおいて、地域規模を統制したコーホート別分布、コーホートを統制した地域規模別分布をみた。度数5未満のセルがであることを無視して、男性の「親のみ」パターンと女性の「配偶者の親のみ」パターンの比率を紹介しておく。男性の場合、都市規模を統制した中間コーホートと後続コーホートにおけるその比率は（先行コーホートの該当数はあまりにも小さいので除外）、「13大都市」以外はいずれも10ポイント以上中間コーホートの方が上回っている。また、男性いずれのコーホートでも「町村」においてその比率が高い。このことは後続コーホートよりも中間コーホートにおいて顕著で、ここでは「13大都市」23.7%に対して「町村」46.7%である。他方、同様にして女性の「配偶者の親のみ」パターンの比率をみると、やはりどの地域規模でも中間コーホートの方が高く、いずれのコーホートでも「町村」での比率が高い。女性中間コーホートにおけるその比率は33.8%である。

このように部分的には「家」を髣髴とさせるような家族認知基準がみられるとはいえ、現在の主流は、親族カテゴリー単位の家族認知である。このことは何を意味しているのだろうか。これについての思考は、他の機会に譲りたい。

#### むすびにかえて

以上、NFR98の家族認知データを用いて、各親族カテゴリーに対する家族認知の概況と、その主としてコーホート間の相違を記述し、その変化について探索的な考察を試みた。ここからは、何の結論も得られないことは冒頭にも断ったとおりである。むしろ本稿は、いずれ、家族認知に関する仮説を提示し、それを検証するための、あるいはさまざまな「家族論」を検討するための具体的な材料の1つでありえたらよいと思う。

結論にかわって、ここで得られた知見を列挙しておくことにしよう。

- ① 過半の人びとが家族と認知するカテゴリーは、「子ども」「配偶者」「孫」「子どもの配偶者」「祖父母」であり、生殖核家族の範囲を超えてかなり広い。家族認知率は、この順で高い。
- ② 家族認知率の高さの順位からみると、より近い親等、親等が同じであれば姻族よりも血族、同親等の血族であれば下向世代より上向世代、同親等血族であれば傍系より直系に対して、家族と認知されるがちといえる。
- ③ 祖父母を除くすべての親族カテゴリーにおいて、家族認知率は後続コーホートほど高い。しかし、最後続コーホートでも、祖父母に対する家族認知率は55%と高率である。
- ④ 家族認知あるいは非認知は、基本的に親族カテゴリー単位になされているが、この傾向は後続コーホートほど顕著である。
- ⑤ ほとんどのカテゴリーについての家族認知には、男女差がない。コーホートを問わ

ず認知率に男女差があるのは、「親」と「配偶者の親」の2カテゴリーのみである。

- ⑥ 「親」の家族認知率はコーホートを問わず男性の方が高く、「配偶者の親」のそれは同じく女性の方が高い。また、「親」と「配偶者の親」との認知の仕方で見ると、ほぼ半数は「双方認知」であるものの、「親のみ認知」は男性の方で相対的に多く、「配偶者の親のみ認知」は女性の方が多い。
- ⑦ 「親のみ認知」は男性の方で相対的に多く、「配偶者の親のみ認知」は女性の方が多い傾向、および同一カテゴリーの一部親族だけを家族と認知する傾向は、先行コーホートおよび「町村」においてみられるようである。

#### 参考・引用文献

Firth, R., 1956, *Two Studies of Kinship in London*

藤見純子、1988、「親族と結婚」正岡寛司・望月嵩編『現代家族論』、有斐閣

藤見純子、1983、「家行事遂行における同族と親類」、喜多野清一編、『家族・親族・村落』、早稲田大学出版部

Harris, C. C., 1969, *The Family*, Allen & Unwin (正岡寛司・藤見純子訳、1978、『家族動態の理論』、未来社)

喜多野清一・正岡寛司編著、1975、『「家」と親族組織』、早稲田大学出版部

正岡寛司、1975；「同族と親類」、喜多野・正岡編、1975、『「家」と親族組織』、早稲田大学出版部

正岡寛司、藤見純子・嶋崎尚子、1999、「戦後日本におけるライフコースの持続と変化」、目黒依子・渡辺秀樹編、『講座社会学2 家族』、東京大学出版会

日本家族社会学会全国家族調査研究会、2000、『家族生活についての全国調査』No.1

西岡八郎・才津芳昭、1996、「家族とは何か」、『家族研究年報』No11

(2001年8月30日)

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-5

# 認知された家族ときょうだい関係

Recognized Families and Sibling Relations

藤見純子編

2001年9月

日本家族社会学会  
全国家族調査 (NFR) 研究会